7章 人間の根源の意識

　人間は本質において神である。悪魔はさかさまになった神である。しかし悪魔または悪の力は、生命のより粗悪な階層で神の力を反転させることしかできない。動物にも、人間にも、天使にも、神にも、「霊はすべてのものにある」。魂は群れの一団、星座、光線、ヒエラルキーの多くのものにあり、それぞれのグループは霊的意識の異なる段階を表している。肉体は1 つの人格に属し、すべてのものの対極に属する。

　霊の階層において、すべての「異なる」（di-verse）エレメントが合わさり、エネルギーと質において「普遍的」（uni-versal）になる。自我（personality）の階層では、すべての普遍的な特性が一点から分岐する。そのため、どんな自我もその根源である普遍性のわずかな表現しかできない。しかし自我が高められるにつれて、霊の見地からもとに戻り、自我はますますその普遍的な根源の意識の完全な力を得て、己れを通して大いなる宇宙エネルギーが流れるため、自我はもう外的な階層に形態を保持できなくなるまでに至る。それから自我は変容され、磔刑後のイエスの場合のように、より微細なエネルギーの体で他の階層に働く。それから物質の限界は克服され、「意志」と「意識」は多くの人々、諸世界と諸人種、進化している生命の背後のあらゆる巨大な力とかかわりを持つ。これは自然の法則を支配する、いやそれどころか現れた生命の運命を管理する、法則を制定する宇宙的な体と協力して、自然の法則を「作り」さえする、意識の高みと深みを備えた真の能力であり、実際の熟達（マスタリー）である。

脳、心臓、太陽神経叢の中心

　肉体の人間は、宇宙的人間の原型に倣って作られる。人間は脳で単一性、脳と心臓で二重性、脳と心臓と太陽神経叢の中心で三つ組(三位一体)である。脳は体のすべての部分に属する。心臓の中心（肺つまりプネウマを含む）は、さまざまな性質と機能を表す器官の多くのグループに属する。さらに、心臓と脳は密接に関連し、相互関係にある。魂と霊も同様である。

　自我は、体の太陽神経叢の中心によって表される。なぜなら、ここでは「自我の形態が作られ」、個人的、カルマ的願望と特性が起源だからである。この太陽神経叢の中心は自我に属し、心臓と脳から離れているが、その両方に依存している。しかしその傾向は、心臓と脳または魂と霊が表すすべてのものから離れることである。なぜなら、それ、つまり太陽神経叢は、低級な救われていない自我か、内的な自我が乗る乗り物または戦車であり、低級な性質の馬力により経験へと引きずり込まれ、力の線がもつれて逆にひっくり返され前進が中断させられないように、高級な性質に制御されなければならない。

　脳は、体と体の力を支配するエレメンタルの統治者が住む領域である。ここでは、物質は精錬され浄化されて、より敏感であり、外的な領域のそれよりも「生きている」。太陽神経叢の腹部は、粗い物質が刷新されつつある場所である。肉体の地獄もここにある。つまり堕落の段階、物質が分解され適合する状態になればより高い状態へと高められ、より高い用途のために一層高い領域、脳の天国へと送られる。脳は、右半球と左半球と呼ばれる2つの主要な部分で構成されている。脳の右側は体の左側を支配している。脳の左側は体の右側を支配している。もし、体の左側が麻痺した場合、脳の右側が妨げられいることを示し、逆も同様である。これは、脳の基部の近くで両側の繊維が交差するためである。

磔にされた自我

　自我は、アストラル界の脳の後ろに力の座をもっており、脳とつながり、脳を通して働く。自我は実際、生涯脳に肉体化身する。自我は欲望の鉄の爪によって物質に引き留められており、脳には「カルバリの丘」（\*1）の象徴がある。カルバリの丘は「頭蓋骨」の場所で、そこで生命の線（神経繊維）が十字架の形を取り、輪廻する自我は２人の盗人つまり引き下げる低級自我と引き上げる高級自我の間で、物質に磔にされる。自我（Ego）が勝利をおさめる時、変質の過程によって低級自我（lower self）を高い領域へと引き入れ、高級と低級の自我（self）は両方とも、自我（Ego）ともに天国にいる。

　次の課は特に松果腺と下垂体のオカルト的機能を扱う。

\*1 カルバリの丘（Calvary）…カルバリーはゴルゴタのラテン語名。カルバーリア（頭蓋骨、されこうべ）から来ている。